



野の開墾から始まったと聞き、頭が下がった。御自分の仕事への誇りと自信、自然（の恵み）に対する深い認識が、語られる言葉の中にもじみ出ていて、私達は深い感動と尊敬の念を覚えた。

数か月後、また家族でおじゃますると、今度はたくさんの植物と昆虫の標本を用意して迎えて下さった。これらは「目ノ越の子ども会」の子ども達が、この地で採集し標本にしたものだった。松島さんがこの子ども会を中心になって指導されてこられた。そして、その動機、活動内容、また親身になって子どもたちの世話をなされた当時のエピソードを興味深く伺った。

その後何回かお会いし、お話を伺ううち更に色々知りたくなり、目ノ越部落入植三十五周年記念誌『語りつごう我等のあゆみ』（追補再刊号）と、子ども会実践記録『はまなす』の貴重な資料を拝借し、読ませていただいた。

開拓から農業へ、さらに酪農へという実生活の歩

み、また子ども会活動の歩みは、常により良いものを求めようとする、深い考えに基づく実践の積み重ねだった。その真摯で、ひたむきな姿勢は尊く、胸を打たれた。現在『豊かな日本』と言われるが、過去の多くの方々の御努力があったからこそと知った。精一杯生きてこられた方達の証を、皆様にも御紹介したいと思う。

## 二、『語りつごう我等のあゆみ』より

この記念誌は、昭和五十五年に入植三十五周年を機に発刊されたものに、その後昭和六十三年までの歩みが追補されている。目ノ越部落自治会の発行で、主な内容は、○沿革と概要 ○現況 ○部落史 ○お祝いの言葉 ○各人の思い出 ○写真集 追補では、○若い後継者の声 ○目ノ越の考古学的歴史 ○地域の活力となっている生活改善活動」(全国農業コンクール「名誉賞」受賞の原稿)が載っている。

## (一) 沿革と概要

### (1) 入植の頃

敗戦の昭和二十年秋に数戸が入植し、歴史が始まる。食糧不足の中、政府の緊急開拓政策により、二十一年に青森県内、県外から二十九戸が正式に入植された。

### (2) 営農のうつりかわり

「入植当時、食べる物も農具も資金も技術も更に肥料も不足し、ただ鍬一丁、鎌一丁の手作業をし、せめて耕馬一頭ほしい、畜力農業ができれば……と考えたものです。」と当時をふりかえっておられる。入植の初めはいかにして食べていくか、から始まり、一番手っ取り早い、いもが蒔かれた。肥料の少なくてすむ大小豆も植えられた。年を経るにつれ雑草が増え、除草が楽で食用油の自給もからんでナタネが栽培された。しかしナタネの連作で畑がやせ、雑草がはびこった。

補助金が畑優先であったが、後で開田も始まり、

根気強く水田作りが続けられた。

### (3) 酪農への道

二十八年、晩霜のため、大小豆、馬鈴薯等が全滅する。二十九年も初霜と冷害で被害が続く。二十七年に牛が初めて飼育されたが、徐々に酪農への道を歩み始めた。

### (4) 農業機械への道

「開墾は手起こしから、手耕・馬耕の併用、畜力農業中心になり、更に畜力と耕耘機の併用、耕耘機とトラクターの併用時代を経て、現在のトラクター中心の農作業に変化しました。」と松島さんは書いておられる。目ノ越は機械化の先進地で、良き指導を受けられた。

### (5) 生活環境づくり

昭和二十七年に入植された松島さんは、「当初は三坪の掘立小屋から始まり、十坪半の住宅とは名ばかりの家に馬・山羊・鶏との同居生活が続ぎ、三十三年暮れに妻帯するので十五坪半のやや住宅らしい

ものになり、同年十二月二十四日夕方、電燈がつく迄は明治時代の農民と全く変わらず、家畜と同居しながら、つるべ井戸にランプの灯り、郵便は配達されず、交通は徒歩、運搬は馬車の生活でした。」と書いてある。「思い出」を読むと、家畜のために水を得る苦勞は並大抵ではなかったことがわかる。やつと三十五周年に、目ノ越全域に水道が完成した。三十三年に電燈がつくため、国、県、町への必死の交渉がなされた。

公衆電話一台がはじめて設置されたのは三十六年だが、設置された家の方は、呼びに行くため自動車、スキーで走り廻ったと書いてある。四十八年に各戸に電話が設置された。三十四年にバスが開通する。目ノ越地域は強風地帯だ。二十七年から、「飛砂防備保安林工事」が始まる。海岸飛砂、汐害を防ぎ、人家、道路、農地を保全するためである。十年間で百町歩（約一㎍）が植林された。「十年間も植林に出て下さった方々の汗と魂がにじんでいる。」

と記してある。

(6) 今日に至るまで

「電氣がついたことで、生活の合理化が始まり、農業経営も、自給中心から主要作物の換金と畜産収入もあげる混合農業へ、それから酪農経営へと歩んできました。」松島さんは『大地と共に』と題して、その後の発展過程を述べておられる。「原始農法から、資本主義的合理化されつつある近代酪農経営に、生活の面でも明治時代から、一挙に家庭も畜舎も電化され、水道、電氣はつき、車社会に三十年足らずで変貌したことは、日本の歴史は勿論、世界の歴史の中でも珍しい例だと思えます。」

(二) 「思い出」から

二十三名の方が思い出を綴っておられる。「筆舌に尽くせない苦勞で、いつも死と隣り合わせの生活」「一生忘れない開拓の苦しみ」「激しい労働に、空腹に目が眩み全身の力がぬげ、その場に佇む事し

ばしば……」、「着る物も履物もなくハダシで働いた」等々、想像を絶する御苦労をなさってきた。特に家族が病気になるたり、入院された時は大変だった。鮎を仕入れて、遠くまで歩いて売りに行かれた。「子ども達が野辺地で花売りをして学校の費用に当てた。」さらに不運が重なり、馬が死んだり、「猫の手も借りたい田植時期、五年生の男の子が炊事をしていたところ、不始末で火事となり、家も牛舎も全焼、米一粒もなくなった。」東京への出稼ぎ等々、私は涙なしでは読めなかった。

しかし、こうした言語に絶する御苦労の中にあつて、夢と希望とロマンを胸に持ち続けてこられた。「苦労の連続でしたが、『苦しみをロマンに変えよう』という共通の信念を持って、協同の精神を大切に暮らしてきました。」「農業立国論を交わし、若い気力に満ちていた。」「『いつの日にか人間らしい生活ができる。』との希望、所謂開拓魂のみに生き続けた。」「我々開拓者の流した汗はなんだったのか。

その尊い汗が、友を知り、人生を語り、限りない幸福のロマンを求め続ける人生最大の心の糧である。」と、述懐しておられる。

松島さんは、前述の(6)今日に至るまで、の後に、次のように書いておられる。「ここ迄来るのに知力・体力・技術・資本・全て足りない中で、どの時代も常に全力を尽くしてどんな悪い環境、最悪の状態にも対処してこれましたのも、精神力と目ノ越の地に開拓者として生きるようにと与えられた使命感、部落の人達の団結心と、立ち上げられるように親切なる御指導して下さった先生、親兄弟、友人の暖かい物心両面の御援助と国、県、町の行政面にも支えられたからで……。」と、感謝とお礼を述べておられる。感無量である。

### (三)、子どもの生活

「当時、目ノ越地域から二十数名の子供達が通学していたが、その殆どの子供達が昼食に弁当を持参

していなかった。通学距離にして三乃至六キロ位の子供達が、通学の登下校に空腹をかかえて、……ど  
の子も顔色が悪く、又半ば栄養不良の状態におかれ  
ていた。」とある。

また、當時を思い出すと、全部が苦しい事だけでは  
ない、「春には父と一緒に野山に火を入れ、夏、  
秋には馬に喰わせる草刈場の枯葉焼き、これが私の  
学校から帰っての仕事でした。夕日と枯葉のもえる  
炎が雄大でドラマチックであった。夏は海で泳ぎ、  
しゅり貝を採り海辺でたき火をして食べた。秋は  
栗、あけび、山ぶどうなど、どこの山に行っても持  
てないぐらい沢山あった。冬は家の周りでスキーが  
でき、暗くなるのも忘れて遊び回った。私の子供の  
頃は、自然と友達で、買った物で遊ぶことなどな  
かった。大自然の中で育つことは幸福であったと  
思う。」また、「牛の分娩が難産の時、大きい子牛が  
生まれるのではないかという期待と、親牛も子牛も  
死ぬのではないかという不安が頭の中を駆け巡る。

近所の人達の協力で無事大きな牛が生まれた時の感  
激はひとしおである。」とふりかえっておられる。  
「バス、タクシーもない頃で、お父さんが野辺地駅  
から二十キロ近くも歩いて帰ってきます。その間、  
ランプの芯を細くして、お母さんが童話を子供が暗  
記する程、繰り返し読んで聞かせることもたびたび  
でした。」と書いておられる。

『小さいながらも働き手』『おともたちは牛や羊』  
と題して、大人と一緒に野良仕事をしている子ども  
達、また動物と遊ぶ子ども達の写真が掲載されてい  
る。きびしい生活環境の中にあっても、家族のほの  
ぼのとした絆を感じる。

——つづく——

(はるにれの会)